



題字 井口 文章
再刊 第300号
印刷・発行
錦城高等学校新聞委員会
編集室 2019

みんなでつくる
錦城高校新聞

ありがとうございます、これからも
錦城高校新聞
300号突破!

これまでの成果をひと夏で

新聞・映研・鉄研 全国大会出場

暑い日が続いた令和最初の夏、数多くの部活動が大会に出場し、文化部・運動部とともに好成績を収めた。全国大会や都大会など様々な舞台で健闘した錦城生の思いを取材した。

新聞委員会

新聞部門において編集委員8人が参加した。開会式では年間紙面審査賞で最優秀賞5校、優秀賞7校に選ばれた。高校が表彰され、錦城高校新聞も2年連続で優秀賞(全国大会)を受賞した。



さが総文で優秀賞を受賞し、表彰される編集委員

映研部

7月27日(土)から8月1日(木)まで、佐賀県にて全国高等学校総合文化祭が開催された。大会は3日間にわたり、全国から集まった各都道府県代表の高校生が48班に分かれ、取材を行った。取材場所はサッカースタジアムや城下町、干潟など多種多様。取材後には編集会議を重ね、各班1つの書き新聞を協力して作り上げた。この3日間学んだ他校の新聞製作の秘訣や技術を、これからの紙面作りに活かしていきたい。

鉄道研究部

7月23日(火)、24日(水)に国立オリンピック記念青少年総合センターで、25日(木)にNHKホールで行われた第66回NHK杯全国高校放送コンテストに映画研究部が出場した。東京都大会で準優勝という結果を収めた作品『OMATA STORY』は、準々決勝まで進んだ。

陸上競技部

個人選手権大会で決勝に進出し、9月7日(土)、8日(日)に関東大会へ出場を決めた。内原くんは「仲間からの応援と日頃の練習量が心の支えになりました」と大会を振り返る。また、保坂くんは「射」と語った。

錦城祭へ着々と準備進む

錦城祭のパンフレットについて、パンフレット係のチーフ、高梨真理子さん(2J)に話を聞いた。昨年と違う点は校内図の表示方法。以前は新・旧校舎の図を分けて掲載していたが、今年から同じ階ごとに新・旧校舎を1つにまとめた図に改め



作業を進める美術部員

最後に「正面だけでなく、細部まで見てもらえれば嬉しうです」と畠山さんはメッセージを送った。(燕・卯)

初！生徒によるキャンパスツアー

今年の夏休み、中学生を対象とした学校説明会で錦城生によるキャンパスツアーが開催された。生徒の案内によるキャンパスツアーは今年が初めての取り組みだ。8月20日(火)、雰囲気を知るために参加したという中学3年生の原田すみれさん。原田さんは「錦城生は先生よりも話しやすいので参加して良かったです。先輩が笑顔で説明してくれたことが嬉しかったです」と語る。同じく参加した中学3年生の崎崎風香さんは「実際に錦城高校で生活している先輩から直接話を聞くことができたので、学校の様子を深く知れました」と話した。ガイドを務めた吹奏楽部の丸山奈月さん(2B)は、終始グループの雰囲気が良くなることはなかったと振り返る。自身のガイドについて、失敗はなかったが、10点中5点と厳しめの採点。良かったところは食堂の料理の美味しさを伝えられたことだそう。もう1度ガイドをするなら今回よりも大きな声で、より詳しい話をしたいという。最後に「生徒の視点で情報を伝えることができるので、中学生が錦城のことをより良く知るきっかけになると嬉しいです。これからも生徒による案内を続けて欲しいです」と望んだ。(卯)



錦城生2人1組で中学生を案内中

運動部も大健闘

弓道部 関東大会出場へ

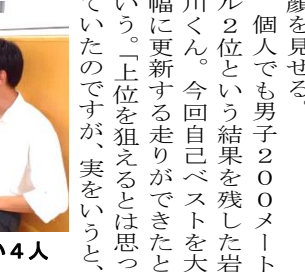
弓道部部長の内原巧輝くん(2I)と保坂亜衣さん(2I)は8月20日(火)から22日(木)にかけて行われた東京都大会に出場し、ベスト16に輝いた。部長の吉口歩里さん(2I)は「目標をベスト8にしていたので、達成できず悔しいです」と語る。一方、最後に対戦した学校は全国ベスト8の強豪校にも関わらず、5回表まで戦うことができた。今後について「新人戦ベスト8を目指して頑張りたいです」と語った。

女子ソフトボール部

ソフトボール部は8月3日(土)に行われた第61回東京都大会に出場し、ベスト16に輝いた。部長の吉口歩里さん(2I)は「目標をベスト8にしていたので、達成できず悔しいです」と語る。一方、最後に対戦した学校は全国ベスト8の強豪校にも関わらず、5回表まで戦うことができた。今後について「新人戦ベスト8を目指して頑張りたいです」と語った。



関東大会へ意気込みを見せる



学年の壁を越えて仲がよい4人

オーストラリアで異文化体験 驚きと成長の20日間

7月29日(月)から8月19日(月)にかけてオーストラリアの研修で学んだ「積極的に動く力」を日々の生活に生かしたいと熱意を語った。仲田さんは、研修に参加した理由を「英語の勉強をする」ときのモチベーションにするためです」と話す。オーストラリアで3週間生活して一番の思い出としてホームステイ先の家族と「Eikai」という言葉が思い出された。仲田さんは、研修に参加した理由を「英語の勉強をする」ときのモチベーションにするためです」と話す。オーストラリアで3週間生活して一番の思い出としてホームステイ先の家族と「Eikai」という言葉が思い出された。仲田さんは、研修に参加した理由を「英語の勉強をする」ときのモチベーションにするためです」と話す。オーストラリアで3週間生活して一番の思い出としてホームステイ先の家族と「Eikai」という言葉が思い出された。



仲田さん、ホストファミリーとの1枚

むらさき草

錦城高校に入社後、国語の作文が好きだったのと、実績に惹かれて新聞委員会編集室に入った。編集室の活動ではセミナーに参加して他校の新聞委員と交流したり、元日本代表のスポーツ選手に取材する機会があったりと、貴重な経験ができた。作文は得意だったが、作文と記事は全く異なることが分かった。記事は事実を簡潔に伝えなければならぬ。先輩に何度も添削をもらい、少しずつ慣れていった。しかし何度書いても苦手が抜けないものがある。この「むらさき草」だ。むらさき草は再刊27号から速報版を除きほぼ毎号に掲載されているコラムである。むらさき草の担当が近づくにつれて、自分でもテーマを探し、文を書くのがなかなか難しい。自分の意見を入れ過ぎるとポエムになってしまう。インターネットの情報に頼りすぎてはいけない。頭を絞ってようやく書き切ると添削をお願いしに行く。何日もかけて書いた文がボツになったこともあるし、コピーと言われることも多い。その添削を基に書き直す。この添削修正作業には何十回も繰り返して、やっと完成にこぎつける。書いている途中で嫌になることも多いが、大変な分、書き上がったときの達成感は格別だ。むらさき草のテーマは高校生に関係のあることならなんでもよい。書き手からすると「なんでもよい」が厄介なのだが、それがむらさき草のおもしろさ。ひとつとして同じむらさき草は存在しない。過去のむらさき草を読むと、編集委員がやっとならぬ思いで完成させた個性あふれるむらさき草に出会える。興味や自然災害を題材にしたものなど、自分では考え付かないテーマや切り口に感動する。今号で錦城高校新聞は再刊300号を迎えた。昭和39年に創刊号が発行されてから約65年。途中中断時期があったが、2001年から「再刊」の形でもまた1号から作成されてきた。錦城高校新聞はこれからも生徒に求められる新聞を目指して進化を続けていく。3001号もお楽しみに。(蓮)

新聞委員会は、7月29日(月)～31日(水)に佐賀県で行われた第43回全国高等学校総合文化祭の新聞部門に東京都代表として参加した。全国から集まった高校生たちとの取材・新聞制作を通して学んだことを、実際に取材したコースと一緒に紹介する。

(2年生共同取材)

① 佐賀コース

佐賀県の県庁所在地である佐賀市には、今昔の佐賀文化を発信する場所が多くある。中でも有名な大隈重信記念館には、重信の貴重な遺物が展示されており、彼が使っていた義足なども見ることができた。また、館の敷地内には彼が青年期を過ごした旧宅がある。今回の取材では特別に2階の勉強部屋に入ることが可能であったため、彼が勉強に励んだ空間を感じることができた。館長の江口直明さんは、重信について調べれば調べるほど面白い人物と楽しそうに話した。

② 小城コース

佐賀県の中央部に位置し、自然豊かな小城市。ここでは近くの天山から流れる名水を使ったお酒の醸造が盛んである。取材班は、小城市内にある小柳酒造株式会社を訪れ、酒蔵を見学し、そこで働く人へインタビューを行った。小柳製造は1804年に創業し、現在は小柳平一朗さん



他校の新聞部員と新聞制作をする編集委員

③ 唐津コース

今でも歴史や文化が多く残っている唐津市はかつて城下町として栄えていた町だ。取材班は唐津城、秋季祭「唐津くんち」で有名な唐津神社、祭りで使用される曳山(ひきやま)を展示している曳山展示場を訪れた。



佐賀の町を見つめる大隈重信公像



①～⑥はコースに対応
★は吉野ヶ里歴史公園を示す

武雄温泉新館から見た楼門

東よか干潟

真つ白い天守閣が特徴的な唐津城。実はこの天守閣は再建されたもので、築城当初は天守閣が存在しなかったそう。再建の目的は観光客を呼ぶため、現在は年間20万人が訪れるという。館長の井上和彦さんは「唐津城が唐津の『情報発信基地』の役割を担っていた」と話した。秋季例大祭唐津くんちでは、

町ごとに曳山と呼ばれる山車を担いで市内を巡行する。祭りに参加している鶴田直久さんは、くんちはみんな盛り上げるのが楽しいと話す。現在の悩みは後継者不足で、町の人の助けが必要な現状だと鶴田さん。「伝統の継承に責任を感じています」と語った。地元の人々の工夫や努力によって歴史、文化を残すことが出来ると感じた。

④ 武雄コース

武雄は建築遺産が多く残る町。取材班は市の中心に位置する武雄温泉新館・楼門を訪れた。

新館、楼門はどちらも東京駅や日本銀行本店の設計も手がけた人物である辰野金吾によって設計され、約1300年の歴史も持つ。また、新館・楼門はともに国の重要文化財に指定されている。温泉の入り口に立つ塗朱りの楼門を2階に上がると天井の四隅に、東西南北を表す「子」「卯」「午」「酉」の彫り絵を見ることが出来る。東京駅南北ドームの天井には10支のうち8つがあり、なぜ8つなのか長年謎だったが武雄温泉のものをおあわせて10支になると話題に。総務課長の岸川日出男さんは「楼門に十二支全て彫られていたら東京駅にはなかつたかもしれませぬ」と話した。新館には宮本武蔵や伊達政宗、伊能忠敬などが入浴した記録もある。2020東京オリンピックで聖火リレーが武雄温泉楼門の前を通ることが決定し、さらに注目を集めている武雄温泉新館・楼門。遠い佐賀の地で

⑤ 鳥栖コース

東京との繋がりを発見した。

楼門の2階で説明を聞く高校生記者

高校生記者と発見!2019さが総文 佐賀の魅力てんこもり

8月28日(水)に九州北部を大雨が襲い佐賀、福岡、長崎の3県に大雨特別警報が発令。大会で巡った佐賀の各地も浸水の被害を受けました。錦城高校新聞一同、お世話になった佐賀の皆様より早い復興をお祈りします。佐賀のみんなをがばい応援しとっけんね!

佐賀から高知へ

7月31日(水)、佐賀勤労者体育センターで佐賀大会の新聞部門閉会式が行われた。次年度開催県として代表挨拶をしたのは、こちら総文の新聞部門生徒実行委員長、高知県立追手前高等学校2年の瀧下一平くん。瀧下くんの思う高知の魅力は、県外や国外から来た方を温かく迎える県民性だ。「高知には、来てもらえれば必ず満足してもらえます。暑いもので溢れています」と熱く語る。最後に瀧下くんは「高知の魅力にたくさん触れてもらい、ワクワクしてもらえる大会にしたいです」と誓い、挨拶を締めくくった。



佐賀の生徒委員会(左)から高知の生徒委員会(右)へ引継ぎをする様子

鳥栖の製菓業は江戸時代にこの地で広まった「田代菓業」から始まり、現在では「久光製菓」に姿を変えて、今なお佐賀の産業を支えている。今回の取材を通して、鳥栖の製菓業は全国に大きく影響を及ぼしていることが分かった。

大会Tシャツを交換。総文祭のバトンは高知県へ引き継がれ、2日間に及んだ新聞部門の大会は終了した。(種)

吉野ヶ里歴史公園で研修取材

弥生時代へタイムスリップ

大会終了後、研修取材を吉野ヶ里歴史公園で行った。こいきたいです」と語った。

出土品を展示

展示室では発掘された貴重な資料やレプリカを見ることが出来る。他にも深さ約3メートルもある環濠の一部や甕棺墓なども展示されていた。

団体旅行客が多いと教えてくれたのは、受付の古川英恵さん。質問をして下さるお客さんの方が詳しいことも多く、前年から歴史に興味があり、宿メインに、古代米である赤米など、佐賀の名産品が使われている。また弥生土器の形をしている食器が、ますます遠く時代の雰囲気を感じさせる。印象に残ったことを聞いて「勾玉づくりが楽しかった」と笑顔の娘さん。



歴史を感じる物見櫓

働き始めた当初は資料を見ながら答えていたそうだ。「お客さんから質問されたことに答えてもらいたいと思いましたが、お客様の間で話題が広がります」と話してくれた。(莉)

鳥栖市内にある九州シンクロナン光化学センターでは、次世代の医療技術や新しい物質創生が期待できる「シンクロナン光」について、多くの企業や研究者が日々実験・研究を行っている。

佐賀県など4県に囲まれた内海で、最大で6mの干満の差がある有明海。その一番奥に位置する東よか干潟(佐賀市)は、粘土質の土が河川の堆積や海流によって運ばれ泥干潟として形成された。現在でも干潟は拡大しており、干潮のときは約6km先まで干潟が広がる。また水鳥の貴重な越冬地・中継地となっており、その重要性から2015年5月にラムサール条約(湿地の保存に関する国際条約)に登録された。

しかし最近、海や河川の汚染の影響で漁獲量が減少。ガイドの山田雅雄さんは「7月の九州豪雨でも、大雨で川から流された大量のゴミが干潟に溜まってしましました」と話す。ラムサール条約で

佐賀の「おいしい」をおすすめ

市内に19軒もの羊羹屋が店を構える小城市。その1つの村岡総本舗に交流取材へ行きました!現在の上皇后さまも佐賀を訪れた際、お買い上げになったそうです。食べてみると、ふんわり漂う小豆の上品な香りと豊かな風味が口いっぱいに広がります!代表取締役社長の村岡安廣さんは「抹茶はもちろん、コーヒーにも合う一品ですよ」と話していました。ぜひ日本有数の羊羹生産地である小城市へ足を運んで、実際に口にしてみてください!(李)

前ももんが人気の「ムツゴロウ亭丸善」に行ってきました!出てきたお皿の上には素焼きの真っ黒なムツゴロウの姿が。食べたことはなく、見た目も見慣れないものでしたが、頭から頂いてみると……生臭さなどはなく、身はとてもしゃわらかかったです。泥だらけの干潟に生きているとは思えないような味。骨まで、とてもおいしくいただけます。外見からは想像もつかないようなおいしさに、取材班一同度肝を抜かれました!(梅)



厳選された材料から作られたこだわりの逸品

◎ムツゴロウ亭丸善



見かけによらず食べやすい味